

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(33)

弥生を迎え、名残の寒さも一雨ごとに和らいできました。この時期の雨は、早く花が開いてほしいという願いから「催花雨」とも呼ばれます。春先の草花は、雨の思いに急かされるように、色とりどりの花を咲かせ、可憐な表情を私たちに見せてくれます。

春の気配は、日が暮れてからも感じられます。

春の夜の
闇はあやなし
梅の花
色こそ見えぬ
香やは隠るる

〔古今集〕凡河内躬恒
（春の暗闇は、「闇」と言いながら理解できない。梅の姿こそ見えないけれど、香りは隠れていないのだ）

梅の花は、平安時代以降、姿とともに香りも尊ぶようになりました。桜と並んで春を代表する梅は、月の出ていない暗夜であつても、その気高い香気までは包み隠すことができないのでしよう。

「春の夜」とは、儂く短いことを喩えた言葉でもあります。あつと言つても間に過ぎ去つてしまふ季節だからこそ、野に咲く花や木に集う鳥たちも、力いっぱい輝きを放っているように思われます。

これまで一年間、心の眼を持つことの大切さや、ホトトギスの鳴き声の話、仏様に供える香水や、醍醐味の話、お盆のお供え物や、尼僧の清らかな行いなど、人間の「六根」（眼・耳・鼻・舌・身・意）をテーマに書き進めてきました。

六根・穢梅の庭には、妄想の露も結ばず。



高尾山では梅の開花と共に春の気配を感じ始める

〔平家物語〕熊野参詣
（迷いの罪を悔いる場には、間違つた考えは生まれない）

という言葉のように、日々の行いを正しく見つめながら「六根」を清めていくことは、さまざま悩みや苦しみを洗い流すことに通じるのでしよう。

平安時代のお話。ある所に一人の老女がいました。道心（仏道を修める心）があり、一ヶ月の前半の十五日は仏事（仏様に關わること）を行い、後半の十五日間は日常の

仕事を営んでいました。その仏事の勤め方というのは、いつもお香を買つては近くの全ての寺に持つて行き、仏様に捧げるといふものでした。春と秋には、野や山に出かけて季節の花を摘み、お米や果物なども用意してお香に加えてお供えしました。三宝（仏法僧）にお供えすることを日常としながら、長年にわたつて極楽往生を願つていました。

その後、女性は病氣にかかり、何日も病床に臥します。家族をはじめ集まつた人々は悲しみに暮れ、何とか治そうと努めました。

するとある時、女性は急に身を起こします。着ていた衣は脱げ落ち、右手には一葉の蓮華を手にしていました。鮮やかで美しく、芳しい香りのする蓮の花は、とてもこの世のものとは思えませんでした。

看病の者が尋ねると、女性は答えます。「これは、

折り折りの記 (67)

波多野 重雄

春さむし火の燻る中火渡りす

三月八日（日）高尾山麓で、薬王院恒例の家内安全・無病息災祈願の「火渡り祭」が、大山御貫首の寶劍で魔を切り開き、山伏修験者の清浄払いで火渡りを先導。市民らは火の燻る中嬉々として火渡りをする。そして、高尾山に春を呼ぶ。

人の世の無常を説く『方丈記』の「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」の如く、一滴の水が滝となり、「葦・鶯・桜」とお山の装ひはにぎわしくなり、山の季節到来となる。

（高尾山健康登山親睦会々長）

過山門（二）

厚木市 荒井 一雄

歩晴夜五更
参詣四天王
祈諸願成就
明月星問答

毘沙門の
結印・真言 修めをへ
午前三時の満月を観る
山門に過る（二）

晴夜に歩めば、
五更（午前三時過ぎ）・・・
参詣す、四天王を・・・
諸願成就を祈れば、
（願ひが叶ふかを）
明月と星は問答す・・・

極楽浄土より私を迎えに来た仏様が持つてきてくださった花ですよ」と。するとそのまま息絶えたのでした。

（『今昔物語集』）

ここに登場する女性は、仏様に花や香を供えながら、いつも全てを清らかに保つていました。辛く暗い世の中にあつても、春の梅の花のように、「異香」（すぐれた良い香）を絶えず放つていたのでしよう。それを見ていた仏様は、最後の最期に光を与え、新しい衣服と蓮の花を手渡したのです。

思うにそれは、女性にとって最上のプレゼントだったのではないのでしょうか。蓮を手にし、仏様の微笑みに見守られての旅立ちには、至福の喜びに包まれていたことが想像されます。

春の花、秋の菊、
咲つて我に向へり。
暁の月、朝の風、
情塵を洗ふ。

（空王海 『性霊集』）

（春の花や、秋の菊は、

蕾が開くように優しく私に微笑みかけている。明け方の月や、早朝の風は、さまざま悩み（煩惱）を洗つてくれている。

ここに見える「春の花」「秋の菊」「暁の月」「朝の風」は、全て移ろいやすく儂いものばかりです。忙しい毎日では、つい見過ごしてしまいがちですが、前の女性のように、日頃から自然の息吹に触れ、「六根」を清めることによつてこそ気づく世界なのでしょう。

八宗の相師と言われる龍樹菩薩（一五〇頃〜二五〇頃）は、「六根」について次のように戒めていきます（私に意訳）。

六根を備えて頭が良くて、善い行いをしなければ、人の身に生まれきた甲斐がない。

（『大智度論』）

春の花は風に散りやすいものです。花びらは舞つても、いつかは確かな「心眼の花」を手にしていたいと願います。

（栃木北部教区普濟寺中）

前貫首・山本秀順大和上御命日



二月四日、前貫首・山本秀順大和上の御命日であり、大山御貫首は歴代先師墓地において、懇ろに御回向を致しました。

大和上は平成八年二月四日、世寿八十四歳にて御遷化されました。

当日は爽やかな晴天の下、亡き大和上の御冥福を祈り、墓前に香を手向けました。